全国農業新聞　（第3種郵便物認可）

SDGs達成へ力強

3 すべての人に健康と福祉を

8 働きがいも経済成長も

11 住み続けられるまちづくりを

農福連携で地域共生社会づくり

京都・京田辺市 さんさん山城

「目指すのは農業と福祉それぞれの課題解決と利益につながるWin－Winの関係――」

京都府京田辺市にある障がい者就労継続支援B型事業所「さんさん山城」（運営・社会福祉法人京都聴覚言語障がい者福祉協会）は、農福連携による伝統野菜や特産物の地産地消、廃棄ゼロに取り組み、障がい者が社会の一員として活躍できる地域共生社会づくりを実践している。

聴覚障がい者27人、知的障がい者3人、精神障がい者4人の利用者と職員8人（うち3人は障がい者）が活動するさんさん山城は、農業と福祉を結ぶ架け橋になっている。

特産、伝統野菜を30種以上

生産・加工・販売を通年で

丁寧な仕事が自慢

施設は、2011年に開所。高齢で廃園予定だった農家の茶園16㌶を借り、就労の場として宇治茶の生産を始めた。その後、市内10カ所の耕作放棄地を次々と借り、特産の田辺茄子、伝統野菜の海老芋など約30種類を超す農産物の生産・加工・販売に通年で取り組んでいる。

管理者の藤永実さんは「利用者は定植、管理、収穫、選果、袋詰め、出荷、加工、販売、接客などを行う。障がいの特性に応じた分業体制で丁寧に仕事ができているのが自慢」と話す。

農産物はJAに出荷、規格外のものは加工品に、捨てていた部位も天日干しにして商品化し、環境に優しい廃棄ゼロに取り組む。

海老芋はJAの農家養成塾で栽培技術を学ぶ。ホテル、豚汁の具材に利用している。手摘み抹茶をふんだんに使った濃茶大福や濃茶クッキーも人気だ。

カフェをオープン

17年、施設内にコミュニティーカフェをオープンした。採れたて野菜を使ったワンコイン（500円）ランチを1日1品、日替わりで提供。金額はお釣りの間違いを防ぐため、メニューづくりから接客、調理までを利用者が行う。収益の向上は、利用者の工賃向上につながっている。

ノウフクJAS認定

19年には、生鮮食品と加工食品で「ノウフクJAS」認定第1号施設になった。取得後は仲卸業者とのつながりができ、京懐石料理店や高級ホテルなどとの取引も始まった。

新免修施設長は「JASという規格で評価されたものを作るという誇りが利用者のモチベーションとなり、仕事に力が入る」と話す。

野菜、加工品、カフェの売り上げは5年間で約3倍（20年度は約1500万円）に増加、利用者の平均工賃は1カ月約3万円と、全国の就労継続支援B型事業所の平均工賃の倍近くになっている。

規格外の海老芋の皮むき作業をする利用者

海老芋を収穫する利用者

コミュニティーカフェを担当する利用者

新免施設長（右）と管理者の藤永さん

ブロイラーの糞を燃料に発電事業

宮崎・川南町 みやざきバイオマスリサイクル

宮崎県川南町のみやざきバイオマスリサイクル社は、ブロイラーの出荷羽数全国トップクラスの川南町に立地する。ブロイラーの出荷羽数全国一位の宮崎県川南町の養鶏場から出る鶏糞を燃料に使う発電事業を展開している。

先進事例を視察し、方向性がすぐにまとまったという。

2003年には4社を中心に県内401の養鶏場、九州電力の子会社が共同で出資して同社が立ち上げられた。鶏糞を燃料にしてボイラーを稼働させ、発生した蒸気でタービンを回して発電する仕組みだ。

売電収入で運営

発電出力は年間1万1350㌔ワットで、同社の消費分を差し引いた残余分を九州電力に売電している。

同社の消費分は、鶏舎の暖房や、ボイラーを稼働させるための電力などに使われている。

鶏糞は出資したブロイラー養鶏場から1㌧当たり1100円で買い取り、年間13万2千㌧を焼却している。矢野部長は、「鶏糞を燃料に使う」ことで、石油系燃料の使用量を抑えた残余金が順調に確保できている」と話す。鶏糞は

ニュートラルのサイクルが確立されているという。

さらに、燃焼後の灰は肥料の原料として肥料会社に販売している。灰はリンやカリウムを豊富に含む「良質な原料」だという。矢野部長は、「日本はリン鉱石

適正規

経営モ

小規模放牧酪農を全国に広げようとする木下代表

㊤地元の人が多く訪れる自社店舗、㊦善玉菌を米ぬかと混ぜて発酵させたぼかしを牛に与える

経営が理想だと考えている。これ以上の規模拡大は考えていない。このモデルをそれぞれの地域に合った形で全国に広げていくのが目標」と笑顔を見せる。現在、学生や企業などの視察を受け入れ、講演活動も始めている。